

末黒野

すぐろの

5月号
(通巻921号)



臥竜梅

森清堯

七草粥向かひ合うての五十年
弓なりの浜やどんだの競ひ合ひ
切株の根を浮かすやう霜柱
大寒や尖る山稜際立ちて
凍て空へひと声放ち明烏
冬草の一輪笑める日和かな
かじけ鳥松が小枝にこだはり来
臘梅の数の艶泛き朝日影
夕富士へ一筋の雲春立てり
前山の芽吹き風や鳶の笛
一輪へ矜恃を示し臥竜梅
春北風艶ひるがへす青木の葉

春動く

岡野里子

千重波の躍る崎や初松籟
墨染の僧の一団寒念仏
大寒の風荒ぶ日や句に耽て
洞穴へ寄する白波寒落暉
登頂は夢のまた夢雪の山
四方山の鎮もり解き春近し
雲間より光芒三筋春立てり
蔵窓を開くる本陣春動く
春愁やつると無垢の茹で玉子
日溜りを歩き続けて露の臺
拾ふ掌に消ゆる波音さくら貝
泉水の放つ光彩春景色

空つ風

黒滝志麻子

(顧問)

高波の荒磯に崩れ鯨起し
 大股の村人行くや空つ風
 単線の窓をうづめり雪景色
 灯の温き白川郷や雪積る
 骨太の漁師大根掛けて去り
 草の戸を風の鳴らせり水仙花
 眠る嬰夢に四温の指ひらく
 校庭を囲む木の芽や始業ベル

甲矢集

奔放の日矢

森清信子

灯台の崖へ荒波野水仙
 聖書より重き羊羹寒見舞
 面とりて恥ぢらふ乙女里神楽
 梵鐘の尾を引く夜明け霜柱
 風と日に凜と磨かれ冬木の芽
 凍滝に奔放の日矢束となり
 屈託をすつと溶かして春の雪
 かすかなる水音に覚め露のたう
 谷底へ届かぬ日差冴返る
 潮かぶる船首の国旗春北風

狽犬

石黒興平

狽犬の咆哮山気引締まり
 語部のさも見しごとく雪女
 しんしんと大地しまりぬ霜の声
 煮凝や玻璃の器の適ひたり
 湯たんぽの温みにひたる夜毎かな
 鳴弦に鎮もる社鬼やらひ
 直垂の水際立ちて豆撒きぬ
 暖色に染まる東雲春立てり
 梅が香や保母は園児をまた数へ
 冴返る貼りたる切手やや斜め

乙矢集

配列は音順、月毎の循環



寒の明

太田良一

阿仏尼の眠るやぐらや風花す
足湯ためらふ雪女かも知れぬ
小屋の錠外す山畑春隣
川底の砂の噴流寒明くる
霞立つ遊覧船の発着場
マニキュアの女大工や春火桶
鳥声や大きく開く春障子

つくしんぼ

岡田史女

中七を書きては消すや冬籠
空風の攫つてゆくや立ち話
篋を透けて一条寒落暉
水高く散りて虹立ち出初式
岬廻の風押す背や野水仙
寒の明け竹百幹に風なぎて
せせらぎの綾なす光春来たる

立 春

大川暉美

翁

小田嶋野笛

色足袋の真白き裏や家刀白
霜の夜やサッチモの声ラジオより
目の玉の乾き切つたり去年今年
健脚の翁の表紙初草子
火達磨の片目を剥きぬどんど焼
肉鍋の締めを綴ぢたり寒卵
人肌の二合を手酌追儼の夜

春 隣

高木邦雄

鳥声の弾む沢辺や春隣
日脚伸ぶひと日読み継ぐミステリー
探梅の家路の空や茜雲
春風や仁王の眉に緩びなく
野遊や川跳ぶ児等のしたり顔
梅園の諸人去りて一つ星
春の暮韓紅の雲一朶

楳明り

長尾タイ

懐郷や柱の傷の楳明り
年重ね齢の数の豆を撒く
嘴を背中に埋め鴨の昼
老幹の雅びなる札幌探る
臥竜梅の咲き生む幹の地を這へり
指先の刺されし跡や針祭る
細濁り迷路めきたる蝮の道

忘れ水

池乗恵美子

木枯の果ては何処や久女の忌
もてあます難解パズル風邪心地
長考の末の一手や虎落笛
撞木なき鐘の梵字や枯蓮
立春の日のゆたかなる秀枝かな
代替りの老舗菓子舗や梅ふふむ
忘れ水に気付きてよりの春野かな

雲の色

今村千年

皿洗ひの好きな夫ゐて小正月
富士よりも高みにありぬ梯子乗
節分や緩び初めたる雲の色
おほかたは酒の肴や年の豆
銅鐸の音や白き客船春乗せて
野を焼きて眠る大地を起こしけり
くるくるとドガの踊り子春の風



青炎集

森清

堯選



川崎

滋野

暁

横浜

山口郁子

素気なく銀ぶらの人冬桜
松飾銀座通りの日矢眩し
七種の揃はぬままや七日粥
松過やいつもの嵩の米を研ぎ
新春の卯の字百態書道展
腕を組む翁と媪冬ぬくし

二度三度と煮返すおでんすすむ箸

四温晴散歩帰りの小買物

柝の音に護らるる町や雪催

節替りの儼やらふ声や鬼も内

強東風や密なる絵馬を鳴らしをり

日溜りの手の平ほどや黄水仙

横浜

六崎正善

相模原

板谷俊武

枯蓮や暮色を揺らす風の音

凍星や一人旅路の山の駅

冬萌や谷戸にふくらむ水の音

笹鳴や谷戸の小径の行止り

春立てり太極拳の身のこなし

いびつなる都会の空や杉花粉

北下し盲導犬の募金箱

慎ましく手渡す巫女や初御籤

星星を束ぬるすばる幾光年

今朝の雪静寂を破るチエーン音

霜晴や転居は四十五年ぶり

剪定や三年先の実の事も

横浜 上月智子

笹の葉へ振り塩ほどや雪の花
鳥影の高きに移り白障子
カーテンの裾を離れず冬の蠅
捨つる物数ふるばかり着ぶくれて
寒の水瓶の内なる苔の庭
迷ひ無き免許返納四温晴

葉山 伊藤美緒

内露地の庭師の影や敷松葉
枯れ蔦や塀を日向へ移る猫
冬河原頬打つ風の礫めき
雨後の田の泥を啄みかじけ鳥
鳥山の移る潮目や寒日和
良しと聞く病後の経過梅白し

鎌倉 丸山千穂子

冬木立ゆする浜風夕あかね
寝そびれて厨に汲める寒の水
寒垢離や勢へる僧のはじく水
声あげて保父の鬼へと豆を撒く
日の差して生の耀き桜の芽
児童館の灯の瞬きて黄水仙

横浜 松川晶義

宝くじの下一桁や年の暮
神棚に薫の香仄か注連飾る
人見知りする子に泣かれ初笑
買初や己へ贈る吟醸酒
お茶漬に京つけものの四日かな
せがまれて開く絵本や読始

横浜 平木三恵子

玻璃窓や闇より出づる北狐
打ち寄する波の刃や冬の海
碗の飯を少し窪ませ寒卵
ひたひたと濡るる沓脱ぎ寒の雨
寄生木の毬青々と寒茜
背を倒すマツサージ機や日脚伸び

横浜 前原マチ

枯芝や土手を転がる風の子ら
立春や路地に踏まるる昨夜の豆
梅白し一遍像の脚細き
マリア像の指の差す先黄水仙
あたたかや篤く守らるる遊女塚
涅槃図や声を鎮めて見入りたる

耕 土 集 岡野 里子 選



馬車道の喫茶のスープセロリの香

文京

大曲ゆき枝

うたた寝のセーター毛玉増殖中

巫女の指白し小さき鸞替へて
金平糖のぼつちり紅き鬼の豆
沈丁や靴修理待つ店先に

冬深し蕎麦屋の爺の一家言

横濱

河野 礼子

冬日和足湯に集ふ多国籍
しーんと言ふ声聞こへたり能登の冬
出迎へは雪雷や能登の旅
地に響き腹に響くや雪起し

剪定の大樹や拳ふりかざし

横濱

喜田 君江

来し方はほんに短し春の雪

春の泥抜き差しならぬ所まで
古稀傘寿日がな一日を梅の中
アリーナよりブラボアの声東風に乗

狭山 小林 友子

早梅や紙飛行機の巡り来て
寒明や月影探す入間川
機嫌良き夫に角瓶春炬燵
ものの芽や小さきクレヨン缶の中
ゆつくりと歩む河原や名草の芽

宮城 京極 久也

暁旦や雪より白き乳搾る
座布団の下に一粒年の豆
節分や園長先生へとへとに
平和なる日本の空雁帰る
熟睡の村に眠らぬ恋の猫

横濱 小林 拓路

目覚むれば襷レースの二日かな
白き富士望む多摩川初景色
八十八ヶ所瞬時に巡り初大師
臘梅に近づく人の深呼吸
たそがれの森や騒つく寒鴉

春浅し下校の子等の急ぎ足

横浜 毛利 直子

やりくりの話はづみて梅の宿

米寿の師は無病息災春の風
転げたる錠削探し春の風邪
のどけしや博多弁出て長電話

強風によるめく脚や寒の入り

狭山 小山すみ子

風花や会ふ人もなき袖の道

腕まくり夫の手を借り味噌造り

しづり雪驚かさるる山の中
蒼天や凍滝白く輝けり

冬空や駅にアトムの唄流れ

川崎 木村 純子

ハンガーのコートの丸み背の丸み

定期券買ひて通院寒の朝

川向かうの梅満開や橋遠し

一様に帰路静かなり受験生

参道や喝と吾を打つしづり雪

横浜 近藤 知子

探梅や愛犬盾にけもの道

節分や護摩の太鼓の気を浴びて

先達の法螺たからかや節分会

春寒や道に零るる鳥の羽

連日のペットの看護寒卵

狭山 谷安喜美子

炊き込み飯独り豆撒く節替り

春立つやベストの仕上げ精を出し
春浅し庭の野菜を掘り出して
春めくや群るる雀は芝に跳ね

寒の入り増ゆるばかりの皺と染み

横浜 佐々木澄子

動物チョコのバレンタインや今年又

飛梅や母と連立ち願掛けに

恋猫や一途に通ふ闇の中

卒寿過ぎの姉案じつつ曇酒

蒼天の飛行機雲や冬すみれ

狭山 山中 ミツ

泥付きの下仁田葱やつつく鍋

寒卵割ればにんまり黄味ふたつ

室咲きや長寿の兄を祝ふ会

薄氷や光りと遊ぶ万華鏡

階や息整へて初詣

横浜 吉川 俊子

今宵は白ひごと替へたる雑煮味噌

どこまでも船に付き来や冬鷗

火に映えて並ぶ赤顔どんど焼

どんど焼童集まる朝まだき